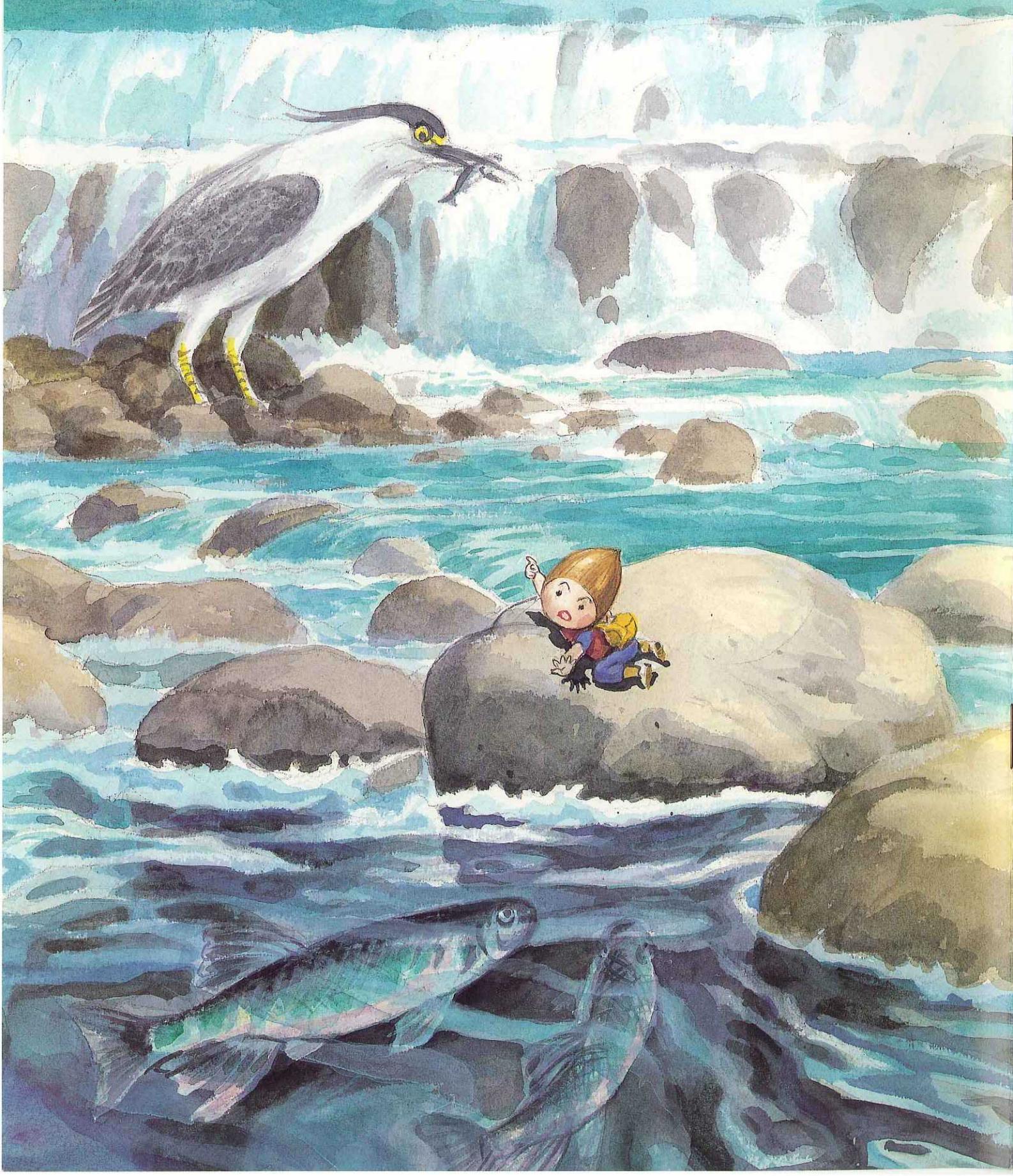


川の木

1998 夏の号



No. 45





てんぐいわ ょうすい

(群馬県前橋市、伝説等より再話)

天狗岩用水

むかし、榛名山に天狗がすんでいたころのお話です。
榛名山の裾野には総社藩があり、秋元長朝という、頭がよく、その
うえ、心のあたたかい殿様がありました。
ある日、主だつた家来をあつめた殿様は、とんでもない計画を話し
始めました。

「この総社の地は荒れ地ばかりじゃ。水田をふやしたいが、水がた
りない。村の者たちは、米の飯ざえろくに食えずにする。わしは、
この地にたっぷりと水を引こうと思うが、どうじゃ」

「しかし、殿、たっぷりと引けるような水はどこにもありますね
「ならば、見せてやろう、ついてくるがよい」

ひらり、と馬にまたがって走り出す殿様のあとを、家来たちも追い
かけて行きます。
やつてきたところは総社の村はずれ、高い崖の上でした。
崖の下は広くひらけ、そこには大きな利根川が、青くかがやいて流れ
っています。

「どうじや、絶えることのないみごとな流れじや
それを聞いて、家来たちは、あきれてしまいました。

たしかに水はたっぷり流れているけれど、あんなにも低いところ
から水を引くなんて、殿様の頭はどうかしている、と思いました。
「みんなの者、よく聞け。崖の下から引けとは言わない、川の上流か
らこの地まで、水路を掘りつなげれば、水は引けるはずじや」
これはたいへん難しい工事です。しかし殿様の決心は固く、その熱
意におされて、家来たちも、計画を練り始めました。

そのうわさは、村むらに流れました。
「用水工事を手伝えば、年貢はおさめなくともよいらしい」

「しかし、となりの国の殿様には、雲に梯子をかけるような話には
協力などできぬ、と笑われたらしいぞ」

「それは、くやしいじやないか、意地でも用水路を掘つてやるぞ
むらびと ひと 村人の心が一つになりました。用水路工事が始まつたのです。

そんな人々のようすを、ひまと余していった榛名山の天狗が、こ
つそりと見ていました。

「ふふん、用水路を掘るなんて、かんたんではないぞ。人間ど

もになにができる、すぐあきらめるにきまつとるわい
ところが、くる日もくる日も、村人たちは汗まみれで働いています。
夏がすぎ、秋がすぎ、やがて冷たい北風に雪が舞つても、人々は休
みません。あかぎれだらけの手で鎌をふり、白い息をはきながら
もっこをかつぎ、用水路は少しずつ、のびていきました。

ひまな天狗は、いらいらしてきました。

「掘り始めてから、かれこれ二年もたつというのに、なんてしつこ
いやつらだ。人間の力でできるわけがないぞえ」
ぶつぶつ言っていた天狗の目が、とつぜんキラリと光りました。
工事場のようすがおかしいのです。人々が用水路の先にあつまって
大騒ぎになっています。

「岩だ、でつかい岩にぶつかってしもうた」

これでは先へ掘り進めません。みんなは必死で岩を掘り出そうとし
ますが、大きな岩はびくともしません。あたりは、すっかり暗くな
つてきました。さすがの人々もとうとう弱音をはき始めました。

「ああ、もうおしまいだ、今までの苦労が白無しだ」

その時です。竜巻のよくな風とともに大岩の上に舞い降りたものが
います。見ると大きな天狗でした。真っ白な髪をなびかせ、人々を
見下ろして大声で笑いました。

「ウハハハハ、とうとう弱音をはいたな。おまえら人間の力もそこ
までじや、用水路はあきらめるんじゃな、ウアッハハハ」

その言葉にムツとした一人の若者が進み出て言いました。

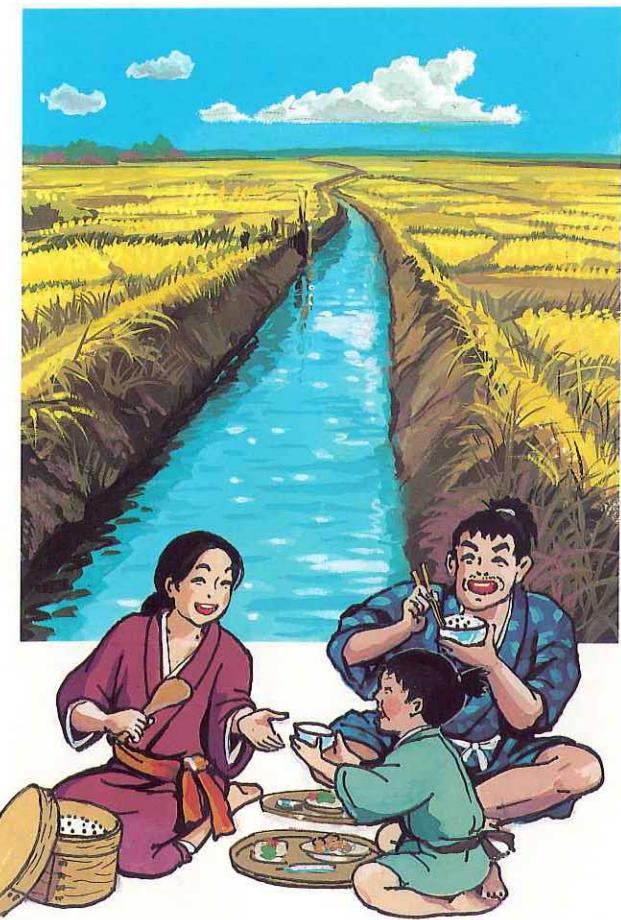
「はい、あきらめるしかないですわい。こんな大岩、どかせる者な
ど、どこにもおりやせん、天狗さまでも無理ですわい」

それを聞いて、天狗はあわてました。

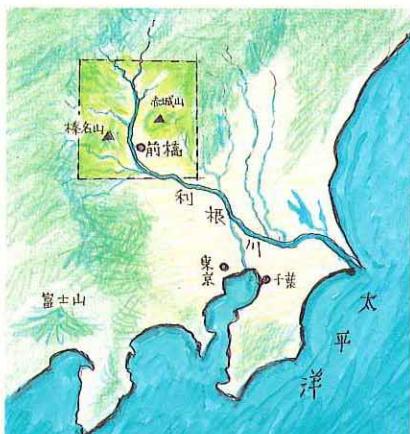
「な、なんだとお、この天狗さまをなめるでないぞえ。わしの力、
ちから、おおいかわの者な



今見せてやるからおどろくな
そう言うがはやいか、天狗は大岩をけつて飛び上がり、すかさず大
岩めがけて「カアツ」と氣合いをいました。
みんなは叩きのめされたようすに地面に放り出されました。
しばらくして顔をあげると、どうでしょう。大岩はあとかたもなく
くだけれ、飛び散つてゐるではありますか。
「わあい、やつたあ。すげえ、すげえ、さすが天狗さまじい光と音がして
村人たちは歓声をあげて、あたりを見回しましたが、もう天狗の姿
はどこにも見あたりませんでした。



天狗の力で大岩がくだかれたので、その後、どんどん工事がはかど
り、三年めには用水路が完成しました。
総社の村むらに、利根川の水がたっぷりと運ばれるようになります
た。荒れ地は、次々と水田に変わりました。
お米がたくさんとれ、おいしいご飯を食べられるようになつた村人
たちは、この用水路を天狗岩用水と呼び、お殿様には、感謝する言
葉を刻んだ碑を建てました。



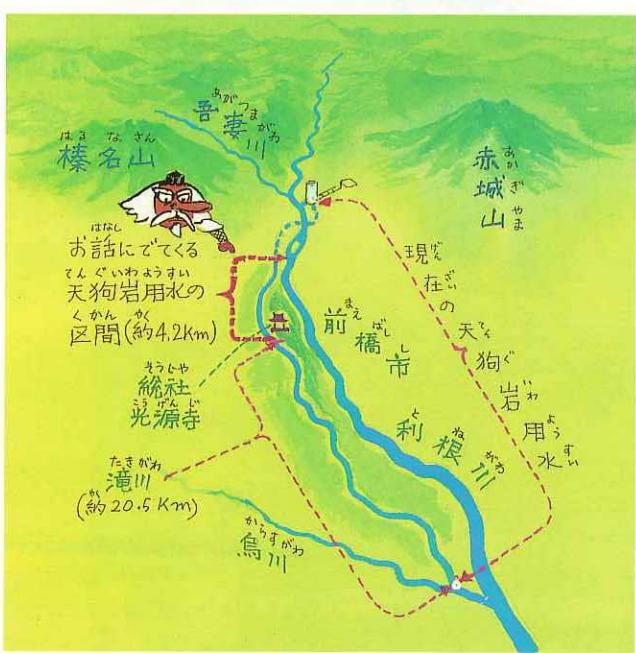
難工事を助けた天狗と利根川

お話の天狗さま、どうやら本当にいたらしいのです。
といつても、鼻が長くて魔力もつた天狗ではありません。
調べてみると、用水路工事の途中、大岩が出てきて困つてゐると、そこに、
一人の山伏があらわれ、村人に指図をして岩をどかせたらしいのです。
その見事な指揮ぶりに感心した人々が、あれは天狗さまにちがいないと語
り合つたのが、天狗岩の名の由来になつています。

今から約400年昔、徳川家康が江戸を開いた頃のお話です。
当初の天狗岩用水は4.2kmほどの小規模なものでしたが、完成の翌年から
5年をかけ、さらに下流へ、20kmあまりもの延長工事を、江原源左衛門と
いう人が、幕府の力もかりておこないました。この区間はその後、一級
河川、滻川に指定されましたが、この区間と上流へ延長された区間も含め
た30km弱が、現在、天狗岩用水と呼ばれています。

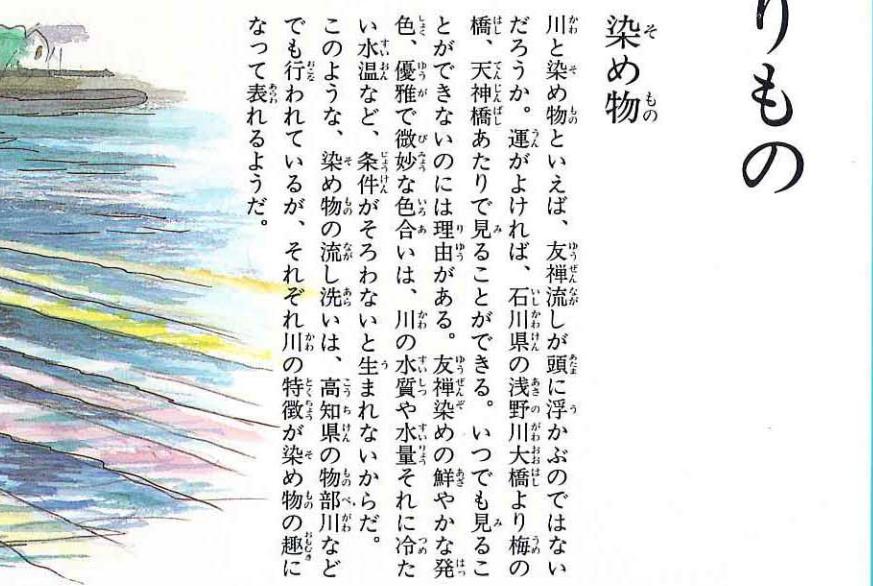
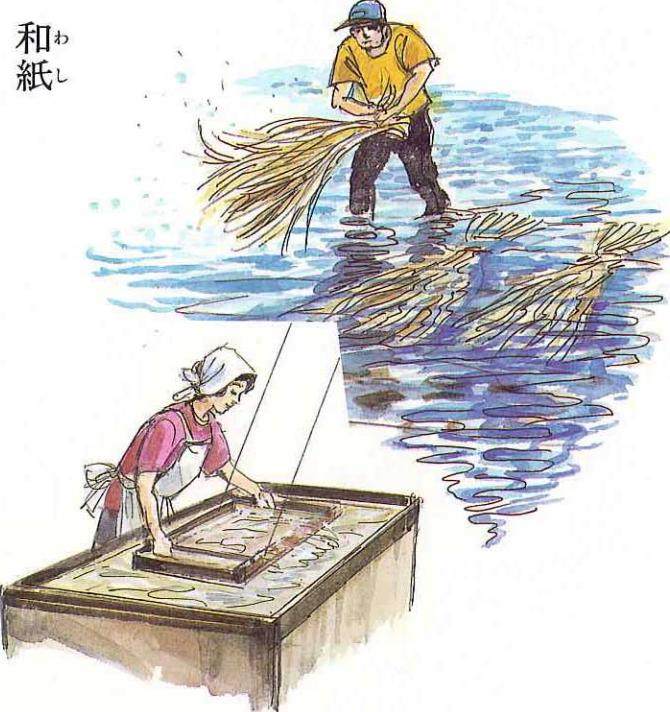
天狗岩用水のおかげで開けたこの地の水田は、今でも、天狗岩用水の水に
たよつてゐるのでです。

この天狗岩用水に水を送り続けている利根川は、群馬、埼玉、栃木、茨城、
千葉の各県をうるおし、東京にも水を分けながら太平洋に流れ出ます。日本
本一の流域面積をもち、日本で二番目の長さ322kmを誇る大河川です。



きれいな水からのおくりもの

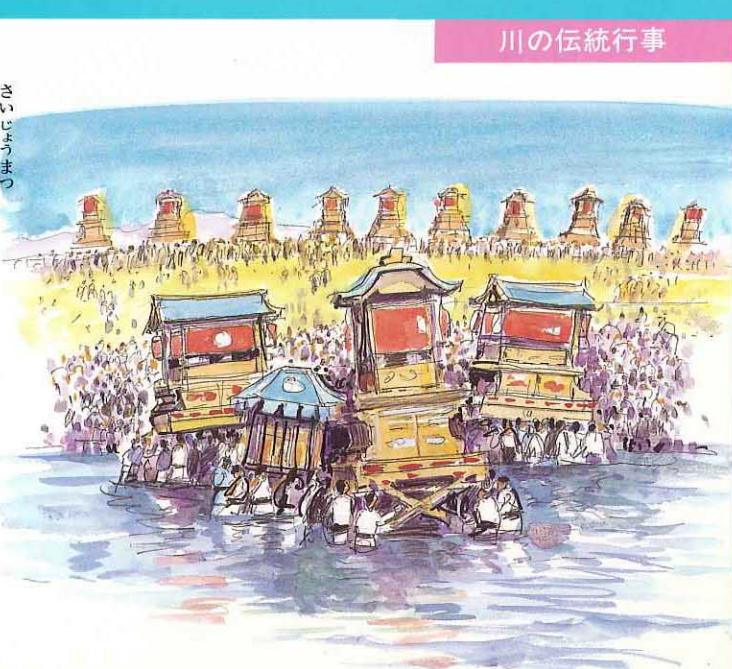
みず



染め物 川と染め物といえば、友禅流しが頭に浮かぶのではないだろうか。運がよければ、石川県の浅野川大橋より梅の橋、天神橋あたりで見ることができる。いつでも見ることができる。いつでも見ることができる。いつでも見ることができる。いつでも見ることができないには理由がある。友禅染めの鮮やかな発色、優雅で微妙な色合いは、川の水質や水量それに冷たい水温など、条件がそろわないと生まれないからだ。このような、染め物の流し洗いは、高知県の物部川などでも行われているが、それぞれ川の特徴が染め物の趣になつて表れるようだ。

和紙 和紙は、国の無形文化財に指定されている美濃和紙のように、コウゾを原料にしたもののが大半を占める。コウゾという植物の枝から、樹皮をはぎとる。更に黒い川の清流で晒す。本晒しの場合、川につけたり乾かしたりと、幾日もこのような工程がくりかえされる。こうして晒された原料を、紙スキが受け取ると、もう一度川で晒し、石灰溶液などで煮た後、また水ですすぎ、アクを抜く。このように和紙は、清流に頼りきつて作られてきた。和紙だけでなく、和紙あればこそ生まれた日本画や書なども、清流がくれたおくりものと言える。

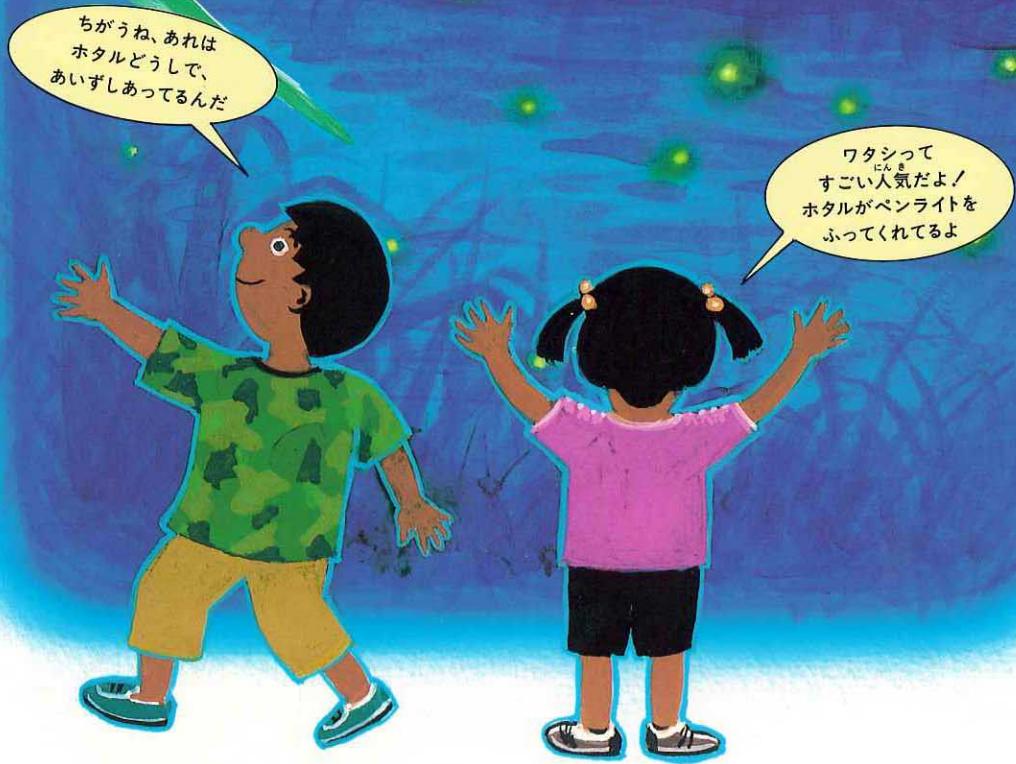
西条祭り 愛媛県西条市、加茂川に繰り広げられる華やかな絵巻き。10月14日から17日、石岡神社、伊曽乃神社、飯積神社の祭礼ですが、西条祭のメインは、伊曽乃神社の15日。16日の中日は朝早くから、伊曽乃神社に神輿の宮出しを迎えるため、各町の屋台が、かねや太鼓でにぎやかに集まつてきます。宮出し後は、市内を練り歩き、夕刻にはお旅所へ着きます。神輿は、ここで一夜を過ごします。翌朝また神輿を迎えるため75余の屋台と御輿（神輿とは異なる）が集まり、神輿に従つて整然と町中をめぐります。やがて、夕刻になり宮入りが近づくと、西条祭最大のクライマックス、神輿の加茂川渡りが始まります。神輿を送る75余りの屋台が土手の上に勢揃いします。神輿の渡御が始まると、別れを惜しむ数台の屋台が水に入り、神輿の宮入りをばもうと、川中で競い合う姿が壯觀です。



川の伝統行事

ホタル、と聞いただけで、なぜか心がほつとするね。虫はきくじよって言つてゐるお姉さんも、ホタルだけは別あつかいだ。ホタルにあいたいなあ、ホタルはどうにじるのかなあ。

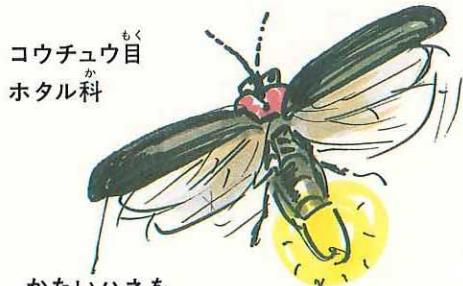
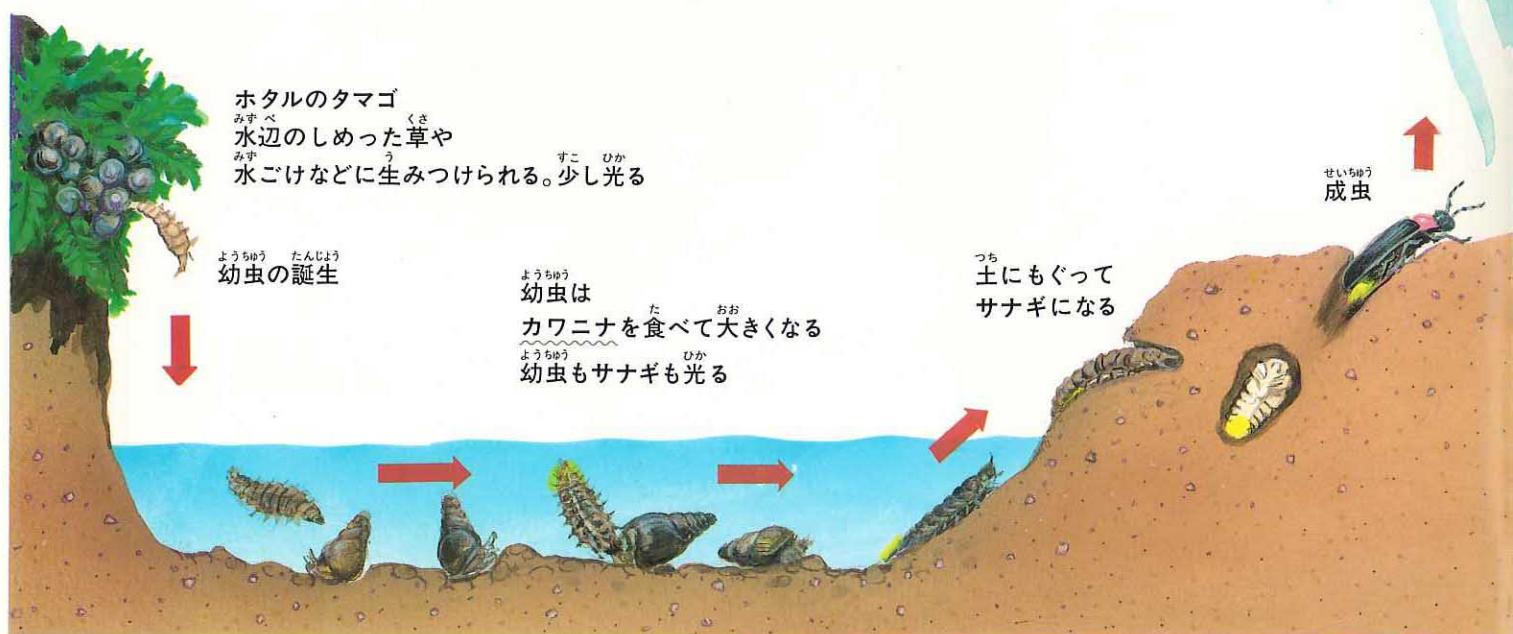
ほたる



ホタル君も
オレさまも、人気者さ
ホタル君は水生昆虫
だけど、カブト虫の
仲間なんだ

ホタルには、光る種類と光らない種類がありますが、日本で人気の高い、よく光るホタルは、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルです。ここに紹介したホタルは、その中でもいちばんよく光るゲンジボタルです。





かたいハネを
パッとひろげ
した
その下のやわらかいハネを
はばたかせてとぶ



かわ こうすい とき さかな
川が洪水の時、お魚はどうしているの？

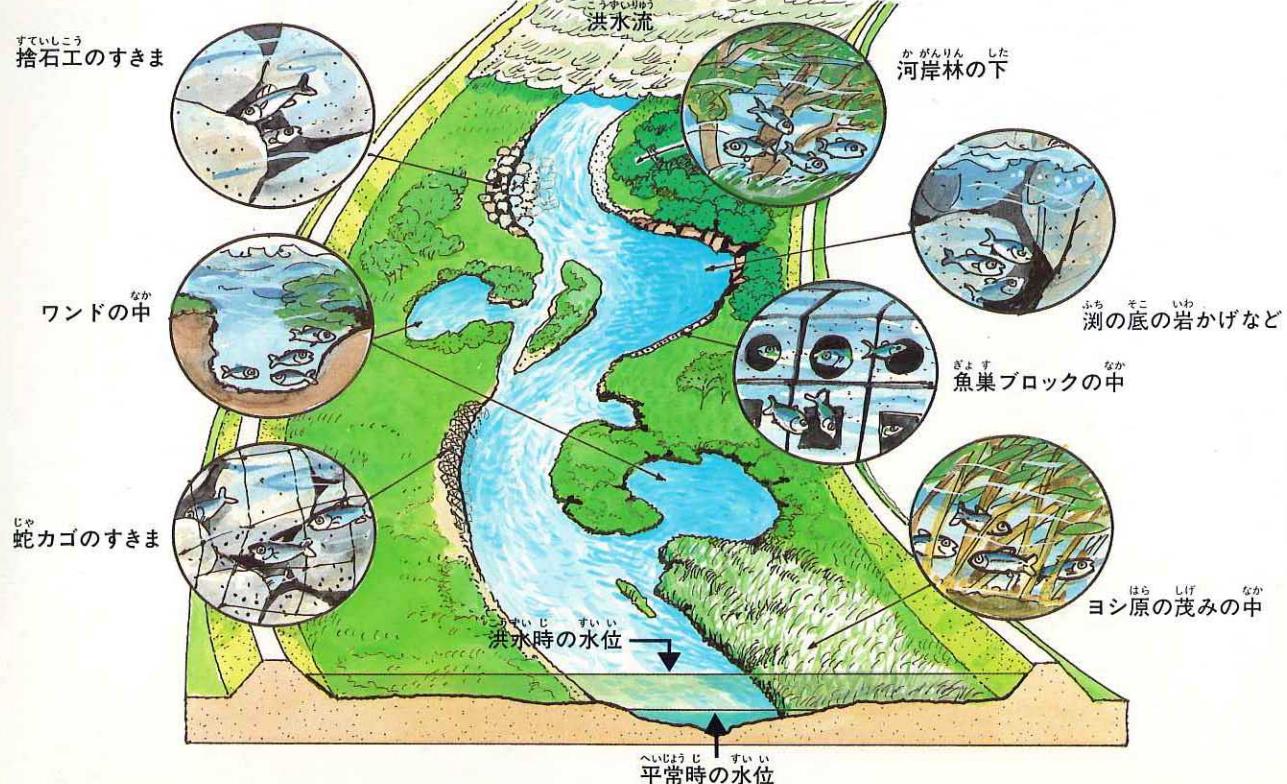
大雨が降りつづいたりすると、急にふえた水が、川幅いっぱいで、すごい勢いで流れはじめます。堤防から水があふれていなくても、こういう状態を洪水といいます。

洪水の時、水の力はおそろしく大きくなります。大きな石でも押し流したり、ひどい時は堤防をこわすことさえあります。

そんなおそろしい流れの中で、お魚たちはどうしているのでしょうか。

洪水は、お魚にとっても一大事です。必死になって大きな岩のかげ、ワンドとよばれる入江、支流の小川、ヨシや水草のしげみ、ブロックの隙間などに逃げ込みます。しかし、逃げ遅れて、渦流に押し流されるお魚もたくさんいるのです。

今、日本の各地ではお魚が安心してすめる環境のいい川をつくるため、「多自然型川づくり」が進められています。



河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- *よりよい水辺のプランニング
- *楽しく安全に遊べる川づくり
- *川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- *未来の水辺を考えた調査や研究
- *せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修 建設省河川局

財団法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management
 (〒104-0042) 東京都中央区入船1丁目9番12号
 TEL.(03)3297-2600(代表)